

[034] 中国文学論集表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/9907>

出版情報：中国文学論集. 34, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

まず冒頭、本年三月二十日の福岡西方沖地震に際しまして、直後より九大中文研究室および書庫の様子を多くの方々からご心配いただきました。幸い研究室の木製書棚一台が前のスチール書棚に寄りかかった（無ければ飛び出していた）のみで、人身事故にも至らず、事無きを得ましたことを、この場を借りてご報告し、お見舞いのメール等を頂戴しました方々に再度御礼を申し上げます。

本号には三月にご退任された岩佐昌暉先生のご略歴とこれまでの業績目録を掲載させていただきました。私事ながら編集子の過去の思い出を告白するのですが、岩佐先生の演習は大変厳しいものでした。あの時の原文をじっくりと見つめられる先生の鋭い眼光は、今でも忘れられません。岩佐先生は常々、我々の九州大学中国文学会そしてその例会たる中国文藝座談会が、その草創当初は現代文学の研究が主で、古典研究がむしろ少なかったことを指摘され、近現代そして当代文学にももっと目配りするよう助言下さいました。今回の第三十四号も、大学院生から中年壮年に至る九篇の、しかも漢代より唐宋、明清各時代の気鋭の論考を収めることができましたが、十九世紀後半以降の論文掲載が叶いませんでした。会員諸士の一層の奮起を呼びかけたいと思います。

さて、本号の論文執筆者と題目が確定し、編集作業がいよいよ始まるうとしていた九月八日、日下みどり先生の訃報が届きました。昨春秋ご入院され、一時は主治医も驚くほどのご回復と訊き、職場に復帰されるのは何時だろうかと思っていた矢先の出来事で、我々研究室の一同もいまだ心の動揺を収めることができない状態です。今はまず十二年間本学でご教導いただいた日下先生の功労に対し、衷心より感謝を申し上げます。

日下先生のあの幅広いご研究を支えていたもの、私がその一端を垣間見た思いがしたのは、ある時（たしか六本松でお昼ご飯をご一緒させていただいた時のことです）「行間を読め」なんて格好の良いこと言ったって、行間には何も書いてないわよ」というお話をうかがった時でした。単なるイメージや先入観だけで作品を読んでゆくことの危うさを、先生は特にご専門の中国戯曲小説や更に日中のサブカルチャー研究の中で感じておられたのでしょうか。我々の文学研究はまず目の前に広げられているその頁を一つ一つ丹念に、真摯に読み解いてゆくことから始めなければならない。師表とすべき言葉だと思います。

（静永）